

も い 森 林 の 話

若手職員のコーナーです

第 36 話
森林技術・支援センター
安田 樹生

新規採用職員として、森林技術・支援センター（以下「技術センター」という。）に赴任して3年目となります。なんとか無事に土別市の厳しい冬も2シーズン乗り越え、これから本格的な夏を迎えようとしています。赴任前まで生活していた東京の気候と比べて、カラッとした北海道の夏は大好きで、今年も思う存分楽しみたいと思います。

今回は、技術センターにおいて実施している、シードトラップを使った種子調査についてご紹介します。

【シードトラップによる種子の回収】

技術センターでは、林業の低コスト化に向けた技術開発とその普及・支援を行っています。

私も業務係として、全道各地の国有林内に設定している試験地調査に同行しています。

その調査の一つに樹木の種子を調べる「シードトラップ調査」があります。天然更新では種子の供給が必要不可欠であり、この調査により種子の発生量を推定することができます。

シードトラップは写真のように、3本の塩ビパイプを地面に挿し、三角帽子をひっくり返したような網を銅線で固定した調査道具です。毎年5月に決まった場所に設置しています。数か月すると樹木の種子が落下、飛散しトラップの中に堆積さ

れ、これを夏と秋の2回、回収しています。回収後は設置箇所毎・種子毎に集計し、データとして蓄積していますが、令和6年度の調査では、これまでで最も多くの種子が採取されました。

【地道な種子の集計】

現在、調査を行っている栗山町の試験地（天然林）では、シードトラップを45箇所を設置しています。採取した種子は、写真のように形や大きさが違うので種子毎にピンセットを使い一つ一つ、分けて数えていきます。種子以外にも葉や昆虫も入り、数えるのにはかなりの時間を要し、仕分けは地味な作業ですが、こうしたデータを確実に蓄積していくことが重要だと考えています。



回収後、種子だけに仕分けた状態

1つのシードトラップで、300 から多いと 5,000 を超える種子が採取されます。

【最後に】

植物に関する調査は、長い年月をかけて植生等の変化を比較し、評価するものなので時間がかかり、中には20年以上継続する調査もあります。

試験課題により調査方法が違うことから、評価や技術の普及には、それらの調査方法を熟知し、多くのデータと知識が必要だと実感しています。

これからも知識・経験を増やしていき、少しでも調査業務に貢献できるよう、取り組んで行きたいと思っています。



設置後のシードトラップの様子